

Lesson 208

発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説事業から身近な歴史と
引き継ぎを考える

安西 春樹

提案・身近で小さな歴史を
振り返り、歴史を学ぶ意義
と引き継ぎを考えませんか

事業を振り返る

本誌読者の方の多くは、仕事として、ボランティア・地域活動として、またライフワークとしてさまざまな地域で「社会教育」に関わっていらっしゃるかと思いますが。

社会教育活動のきっかけは多種多様と思いますが、何かしら前任者や先人から引き継いだ活動もあるのではないのでしょうか。引き継ぐ際には、ただ単に前任者のやり方をそっくりそのままに行うのではなく、参加者や対象者により自身を変えたり、季節、時間、社会情勢などに合わせた工夫を試行するなど、自身の考えや想いなども取り入れて実践されていることでしょうか。

各自の経験や考えに基づいて、自然と行われているかと思いが、時に「どうしてこの活動（事業）を行っているのだろうか？」と

疑問に思ったことはありませんか？特に自身で立ち上げた活動（事業）でなく、前任者から引き継いだものについては、前例踏襲のままに関わっていることがありません。恥ずかしながら私自身もそうですが、新任の頃とにかく慣れることに精いっぱい、その意義をさほど考えることなく続けてしまっていることも多くあります。

「なぜ？」の疑問の前に立ち止まった時、やはり頼りになるのは、経緯・歴史の中にある先人達の想いだと思います。そのような想いを「いま」に至る身近で小さな歴史を辿り触れてみてはいかがでしょうか。

今回は、この18年ほど続いている中央区の生涯学習事業「中央区民カレッジ」が今に至る経緯を振り返り、事業の意味とそれに関わり、築き上げた「ひと」の想いを含め辿ってみたいと思います。

中央区民カレッジの

経緯と「いま」

3年制で続いている中央区民カレッジは、2006年にスタートしました。それまでシニアカレッジとして実施していた部分をシニアコースとして設定。1年目を様々な分野（地域・歴史・生活・文化等）の1回完結のオムニバス形式講座を実施、2年目・3年目は同年代の仲間づくりの意味合いも含め、個々の興味のある分野をじっくりと学ぶクラブ学習（体操・健康・文学・趣味等）をコースの選択必修に設定しています。クラブ学習では、学習活動の入口の区主催講座を経て、より主体的な学びとしてのサークル活動へ移行できる仕組みが考えられました。現在でも中央区民カレッジシニアコースクラブ学習から立ち上がった自主サークルがいくつも活動を続けており、カレッジ修了を機に新規サークルを立ち上げる方、既存サークルに新規メンバーとして参加する方もいます。

シニアコースは60歳以上の区内在住者を対象としていますが、70代、80代でも現役で仕事を持つ方

もいる現在、年齢での対象設定と年齢層に合わせたテーマ設定に課題が生じていると感じることもあります。

18歳以上の区内在住または在勤・在学の方が登録できるまなびのコースも設けています。こちらは、学習講座を自由に受講し、3年間で修了単位を目指すコースとして設定されました。コース内の講座として、「きほんの講座」(当初は「学びの講座」として実施)「趣味の講座」「連携講座」の3つの講座群を設定し、それぞれ「きほんの講座」は、区の担当者が学習テーマを設定し実施する完全直営の講座として、「趣味の講座」は、会場となる中央区立社会教育会館(2009年より指定管理者制度導入により指定管理者が企画・運営)の職員が運営する講座、「連携講座」は区内の企業・大学・美術館等と連携協力して実施する講座として設定されました。

青年学級が中央卸売市場築地市場の関係者で運営され、1999年の青年学級振興法廃止の後も区(教育委員会)主催に切り替わり、後に東京魚市場卸協同組合の協力のもと対象を市場関係者のみならず一般区民向けに引き継いで行われた「魚市場セミナー」や、同じく成人教育分野の中央青年学級、婦人学級等からの引き継ぎ講座もありました。

また、区内の企業、大学、美術館との連携も進められ、区民カレッジの形が整えられました。現在も連携講座として続けているもの、組織の名称が変わったものや移転等の理由で残念ながら終了したのもあります。

中央区民カレッジでは、開校当初から目的のひとつとして「学んだことを地域にいかす」を掲げており、具現化するための仕組みとして、生涯学習サポーター養成コースも設けています。規定単位を履修し、修了後は「中央区生涯学習サポーター」として登録し、社会教育分野のボランティア活動を行

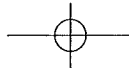
うことを想定したカリキュラムのコースを設定し、現在まで「まち案内ボランティア」、「生涯学習コーディネーター」、「区民メディアリポーター」、「読み聞かせボランティア」など15回のサポーター養成講座を実施し、延べ300人弱ほどの修了生が「学んだことを地域にいかす」を実践してきました。

中央区民カレッジ開校までには、当時の社会教育主事、社会教育主事補の関わりはもちろん、担当職員の試行錯誤がありました。

1990年の「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」を受け、中央区では「生涯学習に関する区民意識調査」を実施。意識調査のデータを勘案しながら、生涯学習事業の体系化や学習機会の拡充、施設基盤の整備、地域と結びついた生涯学習の推進等が1992年に「中央区生涯学習推進計画」としてまとめられました。その柱として生涯学習センターの設置構想が掲げられ、施設の中核事業として生涯学習事業の体系化を目的とした区民大学開設の計画が進められます。

その後、学校跡地利用策のひとつとして区の計画に乗りつつも、高齢者対策・住宅対策等の施策が優先され、実現困難な情勢となり、生涯学習センター設置の見通しが立たない中、1998年にソフト面の区民大学構想を先取りした事業として「まなびシティ中央カレッジ」を開設。青年の仲間づくりが趣旨となっていた「中央青年学級」と、大学の教養課程程度の専門講座を趣旨としていた成人大学事業を統合し、地域課題や社会課題を主なテーマに学習者間での意見交換や事前学習・発表などの参加型学習の展開を目指していました。当時の担当職員の中には、この生涯学習事業の充実により「23区の中でも数少ない総合大学の無い区であるというハンデを克服したい」という想いがあったようです。

前出の「魚市場青年学級」や婦



人学級から受け継がれた「女性セミナー」等の事業を吸収し、2000年には、昼間講座・夜間講座制が整いました。当時の担当職員の記事では、昼間講座については趣味的分野の傾向が強く、区民大学構想の特色が打ち出されていないとされていますが、「成人大学」、「中央青年学級」、「女性セミナー」を母体とした夜間講座については、地域に根差した文化を考察する「江戸・東京文化クラス」、現代的課題を考える「人間学クラス」、国際理解を学ぶ「国際文化クラス」、時事問題理解を図る「ニュースウォッチクラス」、東京の最先端文化を探究する「特別講義」など、区民大学構想の特色を具現化する講座群が開設されていたとされています。

開設までにさまざまな検討と試みがあり、「まなびシティ中央カレッジ」、老人大学の流れをくむ「シニアカレッジ」、社会教育会館で実施されていた「区民文化講座」の統合により2006年に中央区民カレッジ開校を迎えました。

開講当初3つのコース、年49講座でスタートした中央区民カレッジは、2023年の現在も3コース、年間83講座で引き継がれています。

開校から18年ほど経過した現在、振り返るとその間に様々な出来事がありました。開校準備の期間も含め、その都度、時々の担当者による運営の改善が試みられ、試行錯誤されてきました。

大きな出来事として、2007年の組織改正では担当部署が教育委員会事務局から首長部局に移管、前出の社会教育会館の指定管理者制度導入、図書館等複合施設への移転構想、社会教育主事の入れ替わりなど内部的なものから、連携先組織の移転、東日本大震災の影響、近年では新型コロナウイルスの影響などがありました。もちろんその間の国や東京都の施策や法改正などもありました。

小さなものでも、申込方法の改変やオープンカレッジの実施、おためし講座設置、養成コースのフオーアップ講座の実施など、も

もちろん、徐々に変更や修正、廃止、見直しが行われた仕組みもありますが、当時の担当者としての「最善」の積み重ねにより今の形があるのだと感じています。

引き継ぐこと

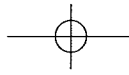
歴史を学ぶ意義

今回、区事業の歴史の一端をほんの少し振り返ったことで、私自身も事業の意義や当初に目指していた事柄に触れ、今後の実践に向けての方向性をあらためて考えるきっかけとなりました。

事業や既存の学習講座について、個々の前任者からの引き継ぎはもちろんありますが、詳細な経緯までは少ない時間で簡単に引き



継ぐことはできません。最小限、効率も考えての引き継ぎが何人もの人を介して続いているのが現状だと思います。その間の歴史の中に、実は大切な先人たちの想いや「いま」が必要とするヒントが残されていることもあります。この小さな「歴史」は、自ら求めてい



かないと時とともにさらに埋もれてしまうことでしょう。自分事として調べ、多角的に見聞きし、読み解き、考え、咀嚼した理解を得ることが必要だと思います。

困難が生じた時、私たちは楽に自分を納得させるための手っ取り早い手段として、「誰か」のせいにしてしまいがちです。「前任者がそうしていた」「前任者から引き継いでいない」はたまた、「社会情勢が合わなくなった」等々。課題を他人事にせず、自分事とするために歴史を学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

また、私たちは学習支援者として人と人をつなぐ役割も持ちつつ活動しています。それは、「いま」存在している人だけでなく、過去に確かに存在し、私たちと同様に悩み、考え、試行錯誤を繰り返してきた先人達ともつなぐ役割を持つことで、より豊かな学びを得られるのではないのでしょうか。そのためには、「いま」に至る歴史を積極的に学ぶことも必要ではないのでしょうか。

多くの歴史は、人の営みそのものです。歴史を学ぶとは、「人」を学ぶこととも言えます。「西暦何年に誰が何をした」をひたすら覚えることだけが学びではありません。「知っている」、「知らない」で学びの深淺を測ることもナンセンスです。また、単に知識を得、それを他者にひけらかしたり、後学へ上から目線で教えることが目的ではなく、知恵の得方をともに伝えられることが必要だと考えます。

史実は事実としてありますが、大小どのような歴史にも史料に残らない多数の「人」が介在したはずです。介在した「人」に対して英雄や戦犯、良い・悪いなどといったレッテルを張り評価をするのではなく、社会情勢や世の中の仕組みの中で、どうして事象が起こったかを史料の中の「人」の想いを類推し、汲み取り、そこから地続きの「いま」を確認し、さらに続く「人」の「未来」を予見すること、「今」の課題から「未来」の解決を導くための手がかりとす

ることが歴史を学ぶ意義なのではないのでしょうか。

史料として残らない当時の「人」の想いは、主観をもって類推するしか手立てがありません。「人」の「想い」は当人ですら時間の流れの中で見失い、婉曲され得るものです。そこには既に事実と主観の混濁があります。それを承知の上で、残る断片、残らない想いを整理し、読み解き、現時点の一点として解釈し、次の瞬間から始まる未来への道標とすることも歴史の価値ではないのでしょうか。

今回の生涯学習事業の小さな歴史の振り返りにしても、残された資料は少なく、もちろん当時を知る職員も、ほんの20年ほど前ではありませんが、ほぼ皆無です。自身の記憶の読み違いもあり、主観による切り取りももちろんあります。もしかしたら婉曲して事実を読み取っている可能性もあります。その上で先人の残した断片から想いを読み取り、引き継ぐのもまた私という「人」を通しての伝聞と諦めるしかないのかと思いま

す。歴史をどう振り返るか、歴史から何を学ぶか、何を引き継ぐか、いち学習者としての力量が試されるところでもあります。機会があれば、さらに当区の生涯学習の流れを遡り、当時を知る「人」から話を伺う機会を持ち、現在に至る事業の意義、当時の想いを引き継ぎつつ「いま」に合った学習支援を模索したいと考えています。

歴史の財産は、なにも世界的な観光地として大いに賑わう地域だけのものとは限りません。歴史が人の営みそのものである以上、人の営みのあるすべての地域は歴史のつまった「古都」とも言えます。自分事として身近な歴史を遡り、みなさんの身の回りの小ささまざまな歴史とそれに関わった「人」の想いを「いま」につなげ、「未来」のための「引き継ぎ」を行うことで、みなさんの古都に花を咲かせてはいかがでしょうか。

安西春樹
(あんざい・はるき)

中央区区民部文化・生涯学習課

総括生涯学習指導員